

聖書:ルカの福音書2章21～35節

説教:異邦人を照らす啓示の光

はじめに

主の御降誕を覚えるクリスマス礼拝を迎えております。この季節になると普段はキリスト教に触れたことのない人たちも、クリスマスをお祝いくださり、誠にありがたいことだと思っております。でも、かつての私がそうであったようにクリスマスがキリストと呼ばれる教祖の誕生を祝う祭りであることくらいは知っていても、そんなことは自分にとってまったく関係ない、とにかく楽しければよい。多くの人たちがそんな時間を過ごしているのではないのでしょうか。クリスマスということで、イエス・キリストとはどのような方であるのか、その方は私たちにどんな関係があるのか、ともに考えていきたいと思えます。

1 シメオン

1) 正しい人

今日開いている所には、およそ二千年前のイスラエルで生まれたイエスと呼ばれる赤ちゃんが生まれて数ヶ月して、エルサレムにある神殿にお参りしたときに起きた出来事が書かれています。そのエルサレムにシメオンという老人がいて、彼は「正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められることを待ち望んで」おりました。

「正しい人」と聞くと、もうそれだけで優等生のクラスの学級委員長みたいな人を想像して近寄りたがたい。そんなふうにも思いませんか。教会に初めて来られた方のほとんど皆が「教会は闕が高いのでなかなか中には入れませんでした」と言います。どうして闕が高いと感じるのかと言いますと、「教会は品行方正で敬虔な信仰心を持った方が行く所」と思っていたと言うのです。私も初めて教会に行ったとき同じことを思っていました。教会の椅子に座っていても実に居心地が悪かったのを覚えています。ずっと後になってから、教会に来る人たちは特別な人たちではない、自分と大して変わらない、それがわかったときに安心して来られるようになりました。

シメオンもそうです。特別に品行方正な人ということではない。では何が「正しい人」であったのか。正しいことが何であるのかわかっていけれど、自分はそれができない。そのことをよく知っていた人。いや、自分だけではない。すべての人は神の前で正しく生きることができないままにいる。

そのことをずっと悲しんでいた。聖書ではそのような人のことを「正しい人」と呼ぶのです。

きょう皆さんに覚えていただきたいのはこのことです。「教会は正しい人の来るところ」と思っていたかもしれませんが、そうではない。「私は正しいことができずに悲しんでいる人が来るところ。」そんなふうにも思っていたきたい。

シメオンは、自分は正しいことができないという深い悲しみをたたえていた人でした。それでこの悲しみを癒し、慰めてくださる方を待っていた。それはいったいどれであったのか。

2) 私の目があなたの御救いを見た

26節。「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。」

ここに出て来るキリストとは何か。これはイスラエルの歴史と関係しております。紀元前千年頃、イスラエルの歴史上初めて王になったのがサウルという人でした。どうやってなったかと言いますと、神があるとき祭司に対してサウルに油を注ぎなさいと言って、それでサウルは王になっていく。そのようないわれから、『油注がれた者』それがキリストと言うことの本来の意味で、やがてイスラエルの王を指すようになります。

シメオンは、主が選んだ油注がれた者、すなわちキリストを必ず見ることになる。そのように言われてずっと待ち続けます。そしてとうとうある日、両親に連れられてイエスと呼ばれる幼子が宮の中に入ってきた。シメオンは、大変感激しながらイエスを腕に抱いてこう言います。29, 30節。「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。」

「この赤ちゃんが、きちんと御救いを成し遂げるのを見るまで長生きしなければ」ではなくて、「もういつ死んでもかまわん」と言っている。どうしてここまで満足できるんか。シメオンはこう言われていました。「あなたは必ず自分の目で生きている間に主のキリストを見る。」それで実際どうなったか。本当に見ることになった。神が語ったことは必ずそのとおりになる。それがわかったわけです。そうしますとこれから先のことはどうですか。目で見なくてもよい。必ず主はイスラエルを

慰めてくださるのがわかるから。だからもう満足するわけです。

2 御救い

1) だれが救うのか

イエスと呼ばれる方が救ってください。ではその救いとはどんなものなのか。もう少し詳しいことを知りたい。それで31, 32節を読みます。「あなたが万民の前に備えられた救いを。異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

前後をつなげて考えると、主のキリストは、私たちが救ってくださいの方であって、同時に光となってくださいの方である。聖書では、私たちが住むこの世界は闇であると言います。闇の中に光となる方が来られる。それが救いである。では、いったいこの光であるかたはだれを救うために来られたのか。そして、その救いはどのような方法でなされるのでしょうか。この二つのことを考えます。

2) だれを救うのか

まずだれを救うのか、そのことから見ます。皆さんこんなことを考えたことはなかったでしょうか。「キリスト教は外国の宗教でしょう。聖書を開いても外国人の名前だらけだし。日本人は昔から先祖が大切に信じてきた宗教を信じてればよいのではないか。」私もかつてそう思っていました。キリスト教はアメリカとかヨーロッパの宗教で日本人には関係ない。本当でしょうか。聖書はなんと言っていますか。31節。「あなたが万民の前に備えられた救い」とあり、32節はこうです。「異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

聖書はイスラエルの人たちの手で書かれましたから、「御民イスラエルの栄光を」というのは当然でしょう。でもそこで終わらない。「異邦人を照らす啓示の光」とあります。異邦人とは、イスラエル以外の外国人です。神の目にはイスラエルはもちろんですが、それ以外の外国人すべて、日本人も含めて全員に救いが与えられている。ですから決してキリスト教は外国の宗教ではない。この救いはすべての人に与えられています。

3) どのように救うのか

続いて二つ目の疑問。神はどのようにして救いをもたらすのか。そのことを考えるために32節の「啓示の光」に注目します。「啓示の光」と聞いても、なんだかよくわからない。そこで続く34, 35節を見ましょう。シメオンは特に母マリアに向け

てこう語ります。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人々が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人々の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

あなたが生んだ子どもはやがて人々の反対にあい、最期には心が剣を刺し貫くようなことをマリアは見なければならぬ。大変厳しいことばです。宮にお参りに来たらこんなことを聞かされるのですから、マリアもつらかったのではないのでしょうか。でも、およそ三十年後にマリアはイエスが十字架につるされて処刑されていくのを見ることになります。そのときシメオンがああとき何を語っていたのか、初めて理解しただろうと思います。

3 やみを照らす光

1) 心のうちにある思い

先ほど「啓示の光」とは何だろうか、と言いました。実は35節の「多くの人々の心のうちの思いが、あらわになるためです」の「あらわになる」、こちらは動詞ですが、これと先ほどの「啓示」これは名詞としてですが、同じことばが使われている。ということはこうなる。シメオンが抱いている幼子イエスは、世界のすべての人の啓示の光となるのだけれど、その光はどこを照らすのか。光は明るいところを照らしますか。そうではなくて暗いところ、やみを照らすのが光です。では暗いところ、闇はどこにあるのでしょうか。今はLED照明が普及してきて昔に比べてずいぶん明るくなりました。もうどこにも暗闇はないようにさえ思う。でも聖書で言っているのは、目に見える世界のことではない。目には見えないけれど、でもはっきりと存在する世界のことを言っている。いったいどこでしょう。「多くの人々の心のうちにある思い」、そう書いています。救い主であり、光となられたイエスは、私たちの心の内にあるやみを照らします。照らされたらどう感じるでしょう。隠していたものがぱっと見えるわけです。自分がそうされたらどうなるか想像してみてください。だいたい、怒り出すでしょう。実際に、人々はイエスのことばを聞いて怒りだし、結局十字架に追いやって殺してしまう。救いは失敗したのでしょうか。

2) 死からよみがえられた方

いいえ。「イスラエルの多くの人々の倒れたり立ち上がったたりするために定められ」とあります。不思議な表現です。でもこう考えてください。真っ先

に倒れたのはだれだったのか。十字架につるされたイエスでした。では立ち上がるとは何か。この方は死んで墓に葬られました。三日目によみがえります。立ち上がるとはそのような意味です。

私たちは何をしたのでしょうか。この方の光で照らされたとき、何がそこにあったのでしょうか。神を殺そうとする思いがそこに潜んでいました。私は悪い人間ではない、と普段は何気ない顔をしながら生活しているけれど、どす黒い罪、だれにも言えない怒りとため込んでいる。そしてまた同時に、どうすることもできない悲しみもそこにあって、私たちは立ちすくんでいたのではないか。

このように自分のことを正直に振り返るならば、私たちは全員、この方の助けを必要としていたのではないのでしょうか。教会は敷居が高いと思っていたかもしれませんが、決してそうではない。むしろ、私はひどい人間だ、私はあの人を赦せない、私はあの人を憎んでいる、私はあの人この人からひどい目に遭わされてきた、いろいろな思いをかかえている人たちこそが、来るべき場所だったのです。

いったいだれが慰めてくれるのでしょうか。人が慰めるのですか。いいで、神である方、イエス・キリストと呼ばれる方が、死を目の前にして絶望している人には永遠のいのちの希望を与え、赦せない思いでいる人には、神の赦しの大きさを十字架で見せてくださって慰めてくださいます。

神である方が救い主となり、人の姿をとられて私たちのところ来てくださったことをともにお祝いしたいと思います。